ＯＡＶ三穴拷貫

～今夜はハードリョナ？

濠門長恭

目次

１．処女喪失はリョナビデオ‥‥ .....- 3 -
２．縄と鎖とフォークリフトで？ .....- 25 -
３．黄金と蟲だけは絶対嫌なの！ - 101 -
４．快感責めで膣アクメ（＾＾） - 163 -
５．楽あれば苦ありの調教部屋？ - 203 -
６．サンドバッグは痛いだけ（泣 - 225 -
７．飛び入りゲストとレズＳＭ！ - 298 -
８．露出遊戯にハマっちゃった♪ - 354 -
９．晴天の霹靂のドンデン返し♡ - 399 -
後書き - 411 -

１．処女喪失はリョナビデオ‥‥

学校から帰ったら、家の斜め前に黒塗りのでかい車が停まってた。何度か見てる車。運転席の人も、知らないけど知ってる。ヤクザ映画でしかお目にかからないような縦ストライプのスーツと銀黒チェックのネクタイ。

借金取立屋さんの子分。親分は、家の中にいるはず。

パパの経営してる小さな工場。銀行が資金を貸してくれなくて、ここから借りて――返せなくなってるみたい。

家は銀行の担保ってやつで、売って返済することもできないらしい。

「これまでだって自転車操業だったんだ。街金も加わって三輪車になったんだから、倒れるわけがない」

意味はよくわからないけど、パパの言葉に良子さんはため息をついてた。

ま、オトナの世界の話だから。わたしとしては、十か月後の●校入試に向けて、いい加減で本気にならないとね。

日坂っていう、わりと珍しい表札を掲げた門から五歩で狭い庭を突っ切って、玄関はいつもよりおしとやかに開けた。

「ただいま」

このお客様には挨拶をしないことになってるので、そのまま自分の部屋へ向かおうとしたんだけど。

「月奈(ルナ)か。ちょっと、こっちへ来なさい」

パパの声。

なんなんだろうなって思ったけど、もちろんそのときは危機感なんて持ち合わせてなかった。

応接室兼パパの部屋を開けたら。パパと良子さんがソファに並んで座ってて、手前にお客様の背中があった。

「いらっしゃいませ」

御客様の斜め前まで進んで、お行儀よくご

挨拶。
「お邪魔してるよ」
　四十歳ちょっとくらいかな。色づかいはおとなしいけど、ダブルのスーツなんて、やっぱりおっかない印象。角張った顔だけど、だから、ちょっとした甘みがすごく印象的。なんて、初対面の人をしげしげと観察しては失礼だから目を伏せたのに。この人、じろじろとわたしを見てる。まるで値踏みしてるみたい。
「それで……いかがでしょうか？」
　パパが、『おうかがい』を立てるみたいに尋ねた。
「うむ。文句なしですね。これなら、手形は書き換えていただいて結構です。ですが、お嬢さんの説得は、これからとか？」
　それには答えず、パパはわたしを振り返った。すがるような目つき。初めて見るパパの表情だ。
「月奈に助けてもらいたいんだ。アイドルビ

デオに出演してくれないか」

あ。ピンときた。それから、ムカッときた。

アイドルビデオなんていうけど、つまりイメージビデオ、もっといえば水着の微エロだよね。だけど、街頭でのスカウトなんかじゃなくて、裏世界とつながってそうな男の人からの、借金の弱みにつけ込んでの話。

そんな男に娘を売り渡すなんて、ひどい。

でも、ムカッときたのはそのことじゃない。パパを助けてあげられるんだったら、水着なんか着なくてもいい。だけど……

「萌咲(モエ)さんもいっしょなの？」

とたんに、パパの顔が苦しそうに変わった。

「いや……あの子は、やはり他人だし。こんなことは、血のつながってる月奈にしか頼めないよ」

ふうん。性器のつながってる他人の萌咲さんのほうが、血のつながってる実の娘より大切なんだ。

これが、萌咲さんだけは私立に進学させる

けど、わたしは偏差値の低い地元の学校で我慢してくれとか、そういう頼みだったら、ムカッをそのまま爆発させるんだけど。
　イメージビデオかあ。それも、かなり怪しい方向。
　わたし、たっぷり三十秒は考え込んでた。ビデオに出る出ないじゃない。ずっと妄想してきたことを実行に移すかどうか。そして、決心をした。
「……わかった。わたしだけが出演する。それで、パパは助かるのね？」
「パパを助けてくれるんだね」
「しょうがないじゃない。血を分けた親子なんだもの」
　横目で良子さんを見ながら、パパには皮肉を交えて返事をした。
「すまない。ほんとうに、ありがとう」
　二人とも、わたしの皮肉に気づいてないみたい。
「五月の連休に撮影という方向で、スケジュ

ールを調整します。それでよろしいですね」
取り立て屋さんが、事務的に話をまとめた。
「わたし、友達のとこへ行ってくるから」
パパがなにか言いかけたけど、わたしはさっさと退出。自部の部屋へは行かずに、カバンを持って家を出た。そして、一方通行のちょっと先をぶらぶら。
パパがママと離婚したことについては、わたしはパパの味方だ。ママの浮気が原因なんだもの。離婚の直前に親権がらみでＤＮＡ鑑定されて、わたしが間違いなくパパの子供だってわかったとき、ほんとうにうれしかった。
離婚してすぐ、良子さんと再婚したことにも、あまり異存はない。良子さんはちょっと浪費家だけど、工場の経営が苦しいのとは、金額の桁が違う。
だけど。あれは――ショックなんてもんじゃなかった。
二年の秋だった。
部活は柔道部なんだけど、男女別々の練習

だし、指導の先生も女の子を締め落としたりはしてくれないので、その頃には幽霊部員になってた。というのを、パパも萌咲さんも知らなかったのね。

階段を上がってくる足音が萌咲さんだけじゃなかったので、さてはボーイフレンドでも連れ込んだかなと、壁に耳をくっつけてたら。

「駄目よ。月奈さんが帰ってくるかもしれないから」

「だいじょうぶ。今日は部活の日だ。早くても六時過ぎだ」

パパの声だった。

「シャワーを浴びてくる」

「萌咲の匂いが好きなんだよ」

どう聞いても、怪しい会話。ますます聞き耳を立てた。けど、会話らしい会話は途絶えて。しばらくすると、ドサッと人がベッドに倒れ込む音。

「やだ……恥ずかしい」

「いい匂いだよ。匂いだけじゃない。とても

きれいだ。ほら……」
「ひゃんっ……パパのエッチ」
「そう言う萌咲も、こんなに濡らしてるぞ」
「……パパがいけないんだから」
　ふだんの、ちょっと澄ました萌咲さんからは想像できない、甘ったれた声。逆にパパの声は掠れてる。
「そうだよ。パパがいけないんだ。もう、こんなになってるぞ」
「わあ……♪」
　それっきり、じゃれ合う声も聞こえなくなった。
　二人が何をしてるか、想像の余地はない。
　わたしはそおっとドアをあけて、そおっとドアを締めて、忍び足で階段を下りて家から出てった。
　わたしが靴を玄関に脱ぎっぱなしにするようになったのは、そのときからだった。
　わたしは萌咲さんを恨まなかったし、不潔だとも思わなかった。ただ、わたしとパパの

血がつながってることが、すごく悔しかった。

萌咲さん。学年は同じで、生まれたのはわたしのほうが一か月半早い。義理の妹ってことになるけど、彼女は日坂萌咲じゃなくて、旧姓のままの松野萌咲。もしも、養子縁組の関係は結婚できないとか、そこまで計算してたとしたら（実の母からパパを寝取るんだもの）かなり怖い。まさか、だけどね。

盗聴器を仕掛けたりはしなかったけど。二人の雰囲気をそういう目で見ていると、今も関係が続いてるのは明白。

おっと……車が動きだした。

わたしは、狭い道のまん中にゆっくりと歩み出た。

自動車もゆっくりと止まった。クラクションは鳴らさずに、後ろのドアからさっきの人が出てきた。わたしをじっと見ている。

後ろから別の車が近づいてきたので、わたしは急いで男の人のところへ行った。

「話があるなら、中で聞くよ」

自分から誘拐されるようなものかなと、ためらったけど。車を止めっぱなしにはできないし。この人といっしょのところを近所の人に見られるのもまずい。
「乗ります」
乗って、車が動きだした。
男の人は、わたしが口を開くのを待ってる。
「出演料って、いくらなんですか？」
当然の質問だと思う。
「うーむ。三百万円ともいえるし、ゼロ円でもあるね。手形というのは、知っているかな」
「約束した日にお金を払うって証文ですよね」
「そういうこと。三百万円の期限が、この月末なんだ。もしきみがビデオに出演してくれれば、期限を四か月先まで伸ばすという約束を、お嬢ちゃんのパパとしたんだよ」
それって、ただ働きみたいに思える。せいぜい利息分。年利一パーセントの四か月分だったら、たった一万円。
「小父さんの考えてるビデオって、ふつうだ

ったら幾らの出演料になるんですか？」
　男の人、くくっと笑った。
「お小遣いがほしいのかな？」
「違います。ちゃんと答えてください」
「五万円。弁当と交通費は別に支給するよ」
　あっさりと、わたしが想像してたよりひと桁少ない金額を答えてくれた。
　きっと嘘だ。運転手を使うような人が、たった五万円のために足を運ぶはずがない。
「アイドルビデオって言ってたけど。かわいいね、もうちょっと脱いでみようか――なんておだてて、ポルノを撮るつもりなんでしょ」
　男の人が、今度はもっとあからさまに笑った。
「だとしたら、どうする？　出演はやめるかな？」
　質問を否定しなかった。わたしの推理、当たってるんだ。
　わたしは、大きく息を吸い込んだ。ここが人生の分かれ目――ちっとも大げさじゃない。

「うんと、過激なポルノにしてください。そして、出演料を四百万円にしてください」
　男の人、今度は笑わなかった。ため息をついた。
「きみがバージンだとしても……」
「バージンです！　まだ●四歳です！」
　ぽんぽんと太腿を（スカートの上から）たたかれて、びくっと身を縮めた。
「ロリータの処女喪失物でも、最近はせいぜい百万円だね。お嬢ちゃんの年齢なら、その半分がいいところだ」
　わたしのバージンって、それだけの価値しかないんだ。でも、わたしの妄想を映像にしたら、ずっと高くなると思う。
　それを言うのは恐いし恥ずかしい。でも、乗りかかった舟じゃなくて、乗ってしまった車だ。いま勇気を出さないと、絶対に後悔する。
「わたしの理想のロスト・バージンは、同時三穴なんです」

んぶ……みたいな声が聞こえたけど、かまわずに続ける。
「縛られて鞭でたたかれて、いろんな拷問をされて。どうか犯してくださいって、無理矢理言わされるような――そんなことばかり、オ、オ、オナニーのとき、妄想してます」
ひと息に言ってしまった。つっかえたけど。
男の人、腕組みなんかして考え込んだ。
「お芝居じゃなく、ガチでだね？」
「はい！」
男の人、苦笑した。
「もし、そういうビデをを撮るとしたら――もしも、だよ。撮影を始めたら、途中でやめるわけにはいかない。たとえ、きみが想像していたより、ずっと厳しくて痛くて、やめたいと思っても、だよ？」
『お嬢ちゃん』から『きみ』に変わった。子供扱いをやめてくれたってことかな。子供のほうが出演料が高いらしいけど、そういう意味じゃなくて。

わたし。妄想の中では何回となく繰り返してきた台詞を、現実の言葉にした。
「どんなに泣き叫んでも、そんなの無視して、うんと虐めてください。三穴だから三人じゃなくて、十人くらいの人に輪姦されてもいいです。輪姦してください」
男の人、また考え込んだ。考えてるあいだに、信号に二回ひっかかった。
とんでもないことを言ってしまったと、後悔はしてないけど恥ずかしくて、わたしはずっとうつむいてた。
二回目の赤信号が青に変わって車が動きだしたとき、やっと男の人が口を開いた。
「四百万は無理だな。きみの希望をかなえるとなると、大掛かりな準備になる。三百万円の手形は帳消しにして、きみのお小遣いは三十万円。これでどうかな」
実は、三百万円だけでもよかった。わたし、お小遣いなんか別にほしくはない――といったら、嘘になるけど。パパを助けてあげたい

というのが、一番の動機だもの。うーん、ほんとは妄想の実現かな。

男の人は胸ポケットから小さなケースを取り出して、中の名刺を渡してくれた。

「連休の早いうちに撮影する方向で、手配をする。何日かは傷の養生が必要だろうからね。もし、恐くなってやめるのなら、名刺にケイタイ番号が書いてあるから、そう言いなさい。ごくふつうの、せいぜいフェラチオどまりのポルノ――最初のシナリオに戻してあげるから」

やっぱり、そんなことを考えてたんだ。

「電話なんか、絶対にしません」

「まあ、じっくり考えなさい」

家の近くまで戻って、車から降ろしてもらって。それから、急にドキドキし始めた。あんな恥ずかしいこと、よく言えたと思う。

だけど。わたしの妄想を安全に実行しようとしたら、このチャンスしかなかったんだ。

ネットで『ご主人様』とかを探すのは、さすがに恐い。でも、あの男の人――もらった名刺には、『株式会社クロベ・ファイナンス／代表取締役／黒部健志』って書いてある。黒部さんがどんな人かはわからないけど、実在する会社の人なんだから、信用できる。社長さんみたいだし。

それに。萌咲さんには三百万円を作ることなんか、できっこない。援交したって無理（相場くらい知ってる）。パパを助けてあげられるのは、わたしだけなんだ。しかも、オナニーのオカズにしてきた妄想が実現するんだから、一石二鳥だ。

だけど。車から降りた瞬間から、後悔も始まってる。妄想と現実との隔たりが大きすぎる。超過激なことを希望したけど、自虐オナニーだって、実はたいしたことはしていない。

自縛はほどけなくなるのが恐いから、ロープで輪っかを作って両手を入れて手首のとこで何度かねじるくらい。胸とかは縛ったこと

がない。だって、緊縛の本来の目的は、相手の自由を奪うことなんだから。胴体だけ厳しく縛っても、しらけるだけ。

あ、股縄は別。洗濯ロープで、しょっちゅう遊んでるけど、まだ外出したことはない。

乳首への洗濯バサミは三分くらい耐えれるけど、クリトリスは（皮の上からでも）秒殺される。だから、後ろ手に緊縛されて自分では洗濯バサミを取れなくて、そのまま何十分も放置されるなんてシチュエーションにすごく憧れる。秒殺された後にそんな妄想でオナニーすると、確実にアクメる。

針は乳首で秒殺というか、ちょこっと突き刺しただけでギブアップ。クリトリスは、恐ろしくて試したことがない。

アヌスには幼児用の縄跳びのグリップ（直径二センチ）まで挿入したことがあるけど、お腹の中が気持ち悪くなるような鈍痛だけで、快感はなかった。もちろん、前はタンポンと指しか挿れたことがない。タンポンはともか

く、指は処女膜を破るんじゃないかって、それが恐くて自粛気味。やっぱ、膜はペニスで破ってもらわなくちゃね。

尿道は未経験。女の子は尿道が短いからぼうこう炎になりやすいっていう。

あと。ローターも持ってない。通販でも、良子さんが受け取って中身に気づいたりしたら、わたしも彼女も困るもの。

ほんと。たいしたことはしてないのに。

縛って鞭打って、ほかにもいろんな拷問をしてほしいなんて、これもいわゆる中二病の一種かな。

でも、初体験はオーラル・アヌス・バギナの三位一体でというのは、譲れない。いきなり十人くらいにというのは、弾みで言ってしまったんだけど。マゾのわたしにふさわしいと思えてきた。

そうだ。唐突に思いついたんだけど。今日から拷問輪姦ロストバージンの日まで、オナニー禁止にしよう。

妄想をつのらせて、性欲を溜め込んで。そしたら、被虐を満喫できるんじゃないかな。

その日のうちに、黒部さんからメッセージが届いて。これは生理期間の確認。連休中は安全日♪。

あ、今は危険日のど真ん中だから。子宮が受胎したがって、だからHな方面で暴走しちゃったのかな。

子宮の思惑とは関係なく、妄想は募り続けた。緊縛と鞭は希望したけど、ほかに何されるんだろうって、あれこれ想像すると。不安で胸が締め付けられるのに、お股はじゅくじゅくになっちゃう。

それでも、月末に黒部さんからパパに連絡があるまで、オナ禁は守った。そして、そのまま当日まで守り抜いた。

パパへの後でわたしのスマホにもメッセージが来たときには、クリトリスを（ショーツの上からだけど）ちょっといじっちゃった。

それだけで、プチアクメ。

だけど、そのメッセージ。『そんなものかな』ってのがひとつと、『とんでもない』ってのがひとつあった。

『そんなもの』は。淫毛のお手入れ禁止。剃毛シーンが欠かせないんだって。これ、的確な指示だね。だって。マゾ雌って、基本パイパンでしょ（偏った知識かな？）。言われなけりゃ事前に処置してたかも。

これまでに一度だけ、全剃りしたことがある。すごくシンプルになってかわいいなと思うけど、具がはみ出てるのは、ちょっと見苦しい。すこし生えてきたとき、ショーツにすれてチクチクするのも大好き。でも、替えのショーツを二枚は学校へ持ってかなくちゃならないのが面倒。部屋干ししてても良子さんに見つかるから、コンビニの使い捨てを買うので、お小遣い的にきつい。

『とんでもない』のほうは。わたしがどんなに本気で嫌がっても虐め続けてくださいっ

てお願いしたことに関連して。

そう簡単に赦しを乞われたら面白くないということで。わたしが「お金なんかいらないからやめて」って言えば、撮影を打ち切ってくれることになった。三百三十万円がパア。冗談じゃない。プロのスパイが自白するような凄まじい拷問にかけられたら、絶対に降参するに決まってる。

それは黒部さんもわかってるので、きちんと限界は設けてくれたけど。『俺の嫁が耐えられた範囲でしか責めない』だって。

ふうん。そういう趣味があったんだ。同好の士ってやつか。それじゃ、わたしなんかはまさしく『飛んで火に入る夏の虫』かな。

かなりびびって、真剣に悩んだ（クリトリスを悪戯したのは、このとき）けど。メッセージを何度かやりとりして、ひとつだけＮＧを認めてもらった。

それは黄金。浣腸はいいけど（期待する）、ウンチを身体に塗ったり、まして食べたりす

るのは絶対に駄目。想像するのも嫌。

うん。聖水はいいよ。ウンチは雑菌の塊だけど、オシッコは（出した直後なら）清潔だものね。

それに。わたしには、絶対に降参しない必殺技がある。これも妄想の常連なんだけどね。

２．縄と鎖とフォークリフトで？

そうして、いよいよ連休に突入。日坂月奈の拷問強姦の膜が貫いて破られる。なんのこっちゃ――なんて冗談にまぎらわせても、喉がつっかえたみたいになって、胸が不安に締め付けられてる。そのくせ、数時間後にはオンナになってるんだと思うと、腰の奥がうずいたりもしてるんだから、わたしってドＭなのか淫乱なのか。きっと、両方だ。

朝早くに、ヤクザファッションの手下さんが、いつもの黒塗りの車で迎えに来てくれた。「イメージビデオ？　どうして教えてくれなかったの？」

寝ぼけまなこで萌咲さんがうらやましがってた。いっそ、（ノーマルな）本番ビデオにでも出演してみる？　あ、男優はパパ以外の人じゃないと許さないからね。

車で連れてかれたのは、小さなフィットネ

スジム。貸し切り。
「ここでは、アリバイのためのイメージビデオを撮るだけだ」
　なので、監督さんとカメラマンとメーク係の女性。この三人は本番撮影にはタッチしない。それから黒部さんと手下さん。総勢五人プラスわたし。
　水着に着替えるシーンで、ばっちり全裸を撮られちゃった。水玉（をくりぬいた板の画像）で局部を隠す処理をするっていうけど。ネットで見たことがある。水玉がふらふら動くんだよね。各画面を合成していけば、かなりの部分が見えちゃうんじゃないかな。
　最初はスクール水着で、Ｙ字バランス（できないので、壁に寄り掛かった）とかヨガもどきなど。
　それからストラップレスでＴバックのビキニに着替えて。ロデオマシンとか、空中ウオーキングマシン（ローアングルで撮影）とかして。あと、最後に全裸でシャワーシーン。

短い休憩を挟みながら、三時間でおしまい。黒部さんと手下さんに、回らないお寿司に連れてってもらったけど、ハンバーグ巻きもないしコーンもカニマヨもプリンもケーキもないので、つまらなかった。それに、午後からのハードな本番でゲロらないようにと、ちょびっとしか食べさせてもらえなかった。ダイエット（？）は黒部さんもつきあってくれたけど、手下さんはウニとかイクラとかトロを次々と頼んで。お店を出たときに、黒部さんに頭をどつかれてた。

つぎの撮影現場は、郊外の倉庫。つぶれた工場の施設で、この日のためにリニューアル（外見は、すさまじくぼろい）したそうだ。フィットネスジムの貸し切りといい、わたしのギャラを値切った七十万円以上にお金を掛けてる？

手下さんは、わたしたちと別れて。近くを歩いてた若い男の人といっしょに、どこかへ

消えた。
「あいつらは見張りだ。何人もいる。ここには誰も近寄せないから、大声で泣きわめいてもだいじょうぶだよ」
黒部さんが、優しい声で恐ろしいことを言ってくれた。
閉ざされたシャッターの脇の通用口から、わたしは地獄（かなあ。まあ、天国じゃないとは思う）に足を踏み入れた。
中は照明だらけで、外と同じくらいに明るかった。でも、壁は外と同じくらいに年季がはいってるし、あちこちに古い木箱とか転がってる。壁際では、古ぼけたフォークリフトが死んでる。
あ。天井から垂れてる鎖がピカピカだ。見上げると、鎖を巻き取るクレーンも真新しい。それと、床。半分くらいに柔らかなマットが敷き詰めてある。
ＳＭの大道具（三角木馬とか磔台とか）は見当たらない。

肝心のスタッフは、この（どの？）世界では名前は知られてないけど有名(なにそれ？)だという監督さんと、ごついビデオカメラを持った人が二人と、いかにもプロ仕様ぽいカメラを首から提げた人と。黒部さんと同じにスーツを着た人と、なぜか汚れた作業服の人と、Ｔシャツにジーンズの若い人が二人。この二人はＡＤ兼穴埋め（きゃ♡）要員かな。わたしと黒部さんを数えて、ちょうど十人。

黒部さんにセーラー服を渡されて、物陰で着替えた。撮影はされなかった。

「メークはしないんですか？」

「涙と鼻水でバケベソになるからな」

バカベソなんて聞いたことないけど、ニュアンスはわかる。

顔バレは、あまり心配していない。このビデオが流出したら、警察も本格捜査に乗り出して、絶対に流出元は摘発される。だから、もっと穏やかなビデオでの購買実績があって身元確認ができた相手にしか売らないそうだ。

まあ、バレたところで、わたしは被害者だから。いざとなれば将来は本番ＳＭ女優になればいいんだし。人生をなめてるとは思うけど。食材の上に寝転がった動画とかをアップする人よりは、ずっと真面目に将来のことを考えてる――つもり。

着替えて。いちおうポニテをツインテに結わえ替えて。そして、いきなり本番が始まった。

黒部さんともうひとりのスーツさんが、わたしの前後に立った。ビデオカメラが黒部さんの後ろと、わたしの真横。

「父親の借金を返せるなら、どんなひどいことをされてもいい。たしかに、そう言ったな」

黒部さんが、ドスの利いた声で尋ねる。

あ、そうか。地のままでいいんだ。シロウトっぽい演技なんかいらないんだ。

「は、はい……」

自然と、わたしの声が震える。

「では、覚悟のほどを見せてもらおう。素っ

裸になれ」

　着替えたばかりのセーラー服を脱ぎ始めたんだけど。役になりきってるというか、アイドル気分が吹っ飛んだというか。イメージビデオのときは、もちろん恥ずかしかったけど、指がわなないたりはしなかった。

　黒部さんは腕組みをして、ただじっと立っている。イメージビデオのときは、画面の外から

「すごくきれいなヌードだ。さすがは処女だ」

とか褒めてくれたけど。今度は無言。かなりおっかない。

　それでも、ソックスまで脱いで、文字どおりに一糸まとわぬ姿になった。

　わたしは、自分からハードなＳＭを志願した、でも処女。キャラ設定が難しい。どう振る舞えばいいか、わからない。ので。前を隠したりせずに、『気をつけ』の姿勢で、つぎの指示じゃなくて命令を待った。

「先生、お願いします」

背後に気配が迫って。両手を背中にねじ上げられた。

いよいよ、縛られるんだ。それも、自分ではできない後ろ手縛り。そう思っただけど、頭がぼうっとしてきて、股間が熱くなる。

手首に縄を巻かれて、腕がW字形になるまで吊り上げられて、胸を縛られた。上乳のところ。いちおうは（ぎりぎり）Cカップの乳房に、まっ赤な縄が食い込む。

基礎知識として知ってたけど、縄は二重で使われてる。ひと巻きでも十分に厳しい。

手首の縄で折り返して、下乳も縛られた。上下から圧迫されて、乳房がひしゃげた。のを、男の人（縄師さん？）が、ぎゅむっとつかんで引っ張り出して形を整えた。見た感じ、Dカップに近づいた。

二本目の縄が、首に巻かれて前に垂らされて、乳房の谷間で上下の胸縄が絞られた。下乳を通って左右に分かれて、脇の下でも縄を絞ｒあれる。上下左右から圧迫されて、でも

乳房はきれいな球形になってる。
　トンッて、肩に軽い衝撃があった。押されたんじゃなくて、ふらついて縄師さんの胸に倒れ込んだみたい。
「驚いたな。初縄で酔っている」
　縄師さんの声が、遠くで聞こえた。
「これは……桃子とそん色のないマゾだな」
　黒部さんの声は、もっと遠い。
「予定を変える。すぐに剃毛だ」
「股縄を堪能させるのですな」
「さすがに、わかってらっしゃる」
　わたしは、後ろ手に縛られたまま、あお向けに寝かされた。手首に体重がかかって、痛くて、ますます頭がかすんできた。
　プシュワワワ……下腹部がひんやりする。脚を広げられて、同じのが股間にも吹き付けられた。太腿から手が離れたけど、あえて閉じたりはしない。もっと見てほしい。
　つうっと、肌に硬い感触が滑った。ああ、剃毛されてるんだと、やっと気づいた。

剃ってるのは黒部さんかな。すごく上手。ちょっとでも刃物が肌を引っかいたりしない。すううっ、すううっと滑ってく。

下腹部が終わると、大淫唇を片側ずつ内側へ指で寄せられて、鼠蹊部を剃られた。大淫唇をめくられて、縁にも刃物が滑る。

「あふ……」

声が出ちゃった。

マングリ返し（手への圧迫が減って、楽になった）にされて、アヌスのまわりまで刃物が侵入した。そんなとこに生えてないってば。

剃り終わったら、両脚を伸ばして揃えた形で縛られた。足首も膝の上も太腿も。

これだけじゃ物足りないなと、ぼんやり考えてたら、腰に縄を巻かれた。

そして。お尻の谷間を割って、閉じ合わせた太腿をこすって、縄が後ろから前へ通された。

あお向けにされて。わずかに顔をのぞかせてる小淫唇が左右に広げられて、その内側に

結びコブが埋められた。そして、股縄がぎゅうっと引き絞られた。クレバスを割って、すごく太い感触が食い込んでくる。

自分でするときの何倍も厳しく引っ張られてる。コブがクレバスに食い込んで、毛羽が小淫唇の内側の粘膜に突き刺さる。

「きひいい……痛い……くうう、ううんん」

ずうんと、股間から背中へ甘い痛みが突き抜けて、そのまま居座って、小さな悲鳴はすぐに甘い吐息に変わってしまった。

股縄が、前で腰縄に絡められて折り返され、二本に分かれて鼠蹊部を通った。

大淫唇を外から圧迫されて、小淫唇は内側から押し出されて――もう、なにがなんだかわからない。

うつ伏せにされて。縄がアヌスの上で結ばれて、こっちも圧迫してくる。

最後に脚を折り曲げられて、足首と手首を別の縄で結ばれた。逆海老ってやつ。

「一服しますか」

縄師さんが立ち上がって、それきり視界から消えた。首をひねって左右を見ても、人影はない。正面に三脚スタンドがあるきり。ビデオを設置して放置プレイかな。

放置プレイといっても、誰かが外へ出てった気配はなかったし、すこしくらい離れててもモニターでドアップを見られてるのは確実だけど。見られていようといまいと、じっくり縄の味を肌に染み込ませたい。

手首がびくとも動かせないのが素敵だし、二の腕に食い込む縄は、逞しい彼氏（現実には、今もかつても存在しない）に抱きすくめられているみたい。縄でくびり出された乳房が床に押しつぶされるのも、適度に苦しくて好き。わざともがいて乳首が擦れるのも痛気持ちいい。

そして、なによりも。股縄の目くるめく食い込み。縛られている以上にぐううっと身体を反らせて、いっそう食い込ませて。

「くううう……んん」

クリトリスが勃起して顔を出したところを、縄に圧迫されて、おしっこを漏らしそうになる。

お金なんていらないから、もっときつく縛ってくださいって言いそうになるくらい。

身体を揺すって、あちこち圧迫されたり擦られたり締め付けられたり。全身を使った床オナニーだ。

「あああ……縛られてる。股縄されてる。見られてる。恥ずかしい……気持ちいい」

言葉にすると、ますます興奮して、バギナが熱く溶けていく。乳房全体が心臓になって脈打つ。

「うああ……白いよ赤いよ……」

頭の中がビジュアル的に真っ白になる。目の前が赤く染まる。

来る……すごく大きな波が、全身を持ち上げて……

「ああああああっ……！　逝くううう！」

私自身が波となって砕け散った。

ふんわかと幸せな気分になって。いつもだったら、股間をきれいにして（家に誰もいなければシャワーを使って）、使った小道具をこそこそと隠しにかかるんだけど。

今は縛られているから……冷めていく余韻を引き戻そうとして、また腰をくねらせ乳房を押しつぶして……つぎの大波が押し寄せる。

そうやって、何度砕け散ったかわからない。ふっと気がつくと。脚が自由になっていて（でも、幸せな疲労で動かせない）、股縄もほどかれかけているところだった。

「ああん……やだ……もっと縛ってて」

ぼすんと、お腹を殴られた。

「うぶ……ぐぶぇえ……」

幸せ気分から一転、苦痛に悶絶しかけた。

「見事な逝きっぷりだったな。いよいよ、おまえの処女をぶち破ってやる」

黒部さんはダブルのスーツを脱いでワイシャツも脱いで、タンクトップ。胸板はごついし腹筋も割れてる。なんて、お腹を殴った人

にうっとりしてて、どうする。
　うっとりしたり悶絶してる場合じゃない。ロストバージンの痛みを、しっかりと味わわなくちゃ。
　腕は縛られたままで、わたしは立たされて。目の前に純白の三角コーンが置かれた。工事現場なんかで立ち入り禁止区域とか示す、とんがり帽子の親玉。
「これが、おまえのロストバージンの相手だ」
　じょ、冗談……！
　これをまたいでスクワットしてる裸の女性の動画を(パパのアカウントでログインして)見たことはある。だけど、わたしは指二本でも痛い処女だよ。こんなの、絶対にはいらない。それに……
「どうした。おまえのために探し出してやったんだぞ。並みのやつより先端が細くて、直径はたったの二十五ミリだ。日本人のペニスの平均以下だぞ」
「そういう問題じゃないです！」

なにが悲しくて、こんな物体に処女を奉げなけりゃならないのよ。バギナにはペニス、それが常識でしょ。
「約束が違います。男の人に……」
同時三穴まで口にしなかったのは、カメラを意識してのこと。地のままでいいと思っていたけど、親の借金のために泣く泣く身体を差し出す薄幸の美少女――みたいなキャラ設定じゃないかなと、思い直したから。
「俺は、そんな約束なんかしていないぞ。三百万円の借金を帳消しにするかわりに、超過激な処女拷問ビオをに出演してもらう。そう約束しただけだ。違うか？」
……違わない。思い出してみたら。わたしの希望をかなえてくれるとは、この人、ひと言も言わなかった。いや『きみの希望をかなえるとしたら』とは言ったと思う。仮定法だ。
「どうする？　三百万円は諦めて、尻尾を巻いてパパの元へ帰るか？」
なんか三十万円を値切られてるような気が

するけど。三十万円には、最初から（あまり）こだわってなかったんだし。
　だけど。百万歩譲って、ロストバージンの相手が三角コーンだとしても。今は嫌だ。
「お金は、諦めません。でも、こんなので処女膜を自分から破るなんて、絶対に嫌です」
　自分からってところを、強調した。大開脚で磔にされて、黒部さんの手でコーンを挿入されるんだったら――そういうのも、有りかなと思った。
　黒部さんは、大きくうなずいた。わたしの反応がシナリオどおりだったのかもしれない。
「困ったお嬢ちゃんだ。しかし、小父さんたちは紳士だからね。女の子が絶対に嫌ということを無理強いはしない」
　へ……？　これ、過激ＳＭビデオじゃなかったの？
「お嬢ちゃんがその気になるまで、小父さんたちと遊んでいようか」
　ワイシャツ姿になってた縄師さんが、背中

で何か所か縄を引っ張ったら、あれほど厳重に複雑に掛けられてた縄が、ぱらりとほどけた。

ＡＤさん二人が、わたしをあお向けに押さえつけて開脚させた。縄師さんが、足首を別々の縄で縛る。

キュン、ウイイイ……

死んでると思ってたフォークリフトが、足元まで走ってきた。運転してるのは、作業服の人。

ウィーンン。車の先端から突き出てる二本のフォークが一メートルくらい左右に開いた。その先に、足首の縄が結び付けられた。

ウィイイイ。フォークがゆっくりと上へスライドしてって。わたしの足首が引き上げられ、腰が浮いて――逆さ吊りになった。

ああ、そういうことか。同時に、二つのことを理解した。

そのひとつは。ここは廃工場の倉庫なんだから、それにふさわしい責めを映像にしよう

という芸術的な（？）目論見。

もうひとつは。わたしがその気になるまで『遊ぶ』という言葉の意味。

がばっと開脚しての逆さ吊りは、いくらなんでも恥ずかし過ぎる。両手で股間を隠した――ら、その手をつかんで引き下げられて、重たい鎖で縛られた。すこしは動かせるけど、鎖を持ち上げるのは無理。

さっきの若い二人が、わたしの前と横に立った。ふたりとも、太い黄色い紐のような物を右手から垂らして持ってる。

その人が右腕を後ろに引いて。

ぶゅん……バチャッ！

「ぎゃはああっ……！」

乳房に凄まじい衝撃があった。衝撃に一瞬遅れて、激痛。

黄色い紐の正体がわかった。プラスチックのチェーンだ。駐車場の仕切とかに使ってるやつ。金属製の鎖に比べれば、ずっと軽いんだろうけど、鞭とはどっちが重いんだろうか。

ぶゅん……バチャチャッ！
「痛いっ……」
腰に巻き付いて、先端がお尻を叩いた。これは、我慢すれば耐えられるくらいの痛み。
ＡＤさんが、今度は右手をまっすぐ上に振りかぶった。ということは……
「やめて！　お股は叩かないで……」
ぶゅん……バジャ！
「ぎゃがあああああっ……！」
股が真っ二つに引き裂かれたと本気で思ったほどの、鋭くて重たい衝撃が、股間で爆発した。
「うあああ……」
打たれた後も、ずっと激痛が居座ってる。
わたし、馬鹿だった。こんなに痛いなんて、想像してなかった。
「どうした。まだ、たった三発だぞ。しかも、本格的な一本鞭ではなく、軽量のプラチェーンだ。素材も太いから、肌が切り裂かれることもない。それでも、これだけの悲鳴か」

本物の鞭だったらもっと痛いし、肌を切り裂かれるなんて……マゾって、そんなのでも快感を得ているんだろうか。

ぶゅんっ……バチャッ！

「ぎゃはああっ……」

また乳房を叩かれた。

「どうする？　ギブアップするか？」

冗談。『ふつう』の裏ＡＶで返済期限を四か月先延ばししてもらっても、そのときに返せる保証はない。そこらあたりを、きちんとパパに聞いておけばよかったと後悔した。

だけど。ここでギブアップしたら、叩かれ損……でもない。本物の緊縛を体験して、縄で縛られてアクメに達するという貴重な経験が……

ぶゅうん……バッヂャン！

「ぎゃわ゛あ゛あ゛あ゛っ……！」

クレバスをまた叩かれた。さっきより、ずっと痛い。脳天まで激痛が突き抜けた。叫んだ瞬間に、目の前で火花が散った。

駄目だ。降参……しないよ！

三百万円のためじゃない。こんな拷問を、黒部さんの奥さんは耐えるっていうんだから。負けるもんか――というのとは違うけど。これしきで降参したら、かえって後悔するような予感がしてる。

くそ。中二病でもなんでもいい。自爆してやる。必殺技を出してやる。

「お願いがあります」

顎を引いただけでは黒部さんの顔が見えないので、腹筋で上体をすこし起こした。逆さまに見上げると、おっかなさが五割増しで別人みたい。

「なんだ？　手加減はしてやらんぞ」

「このままだと……もうやめてって、言ってしまいそうです。だから……」

言いよどむ。自分で自分を究極の地獄に追い込む言葉だもの。でも、言ってしまう。

「だから、しゃべれないようにサルグツワをかませてください！」

言い終わるなり、涙がぶわっと込み上げてきた。泣き出してしまった。
ヒュウウ。口笛。
「驚いたな。●四歳だった頃の桃子とは比較にならないほどの……掘り出し物だ」
かたわらに立っている縄師さんに向かって言って。それからわたしに向き直った。
「後悔することになるぞ」
「もう、してます！」
どうせなら、とことん後悔するところまで突き進んでやる。
黒部さんは、わたしが脱いだ服のところへ行って、ショーツを拾い上げた。撮影用のセーラー服と違って、朝からずっとはいてて、Hなお汁で汚れてる。裏返して、それをわざわざたしかめてから丸めた。
わたしの横に膝を突いて、丸めたショーツを口元に突きつけた。
「望みどおりにしてやる。口を開けろ」
自分の汚れを口に入れるなんて、恥辱って

やつだ。そう思うと、まだ痛みにじんじんしている股間の奥に、別のうずきが生じてしまった。
　開けた口にショーツが突っ込まれて。ガムテープをベタッと貼られた。
「んん、んんん……」
　ほんとに完全に言葉を封じられたのを、声を出してたしかめた。これで、またひとつ妄想が実現した。
　でも、逆さ吊りは妄想にもなかった。よだれも封じられてるからだいじょうぶだけど。たとえば水をぶっ掛けられたりしたら、鼻にはいって息が出来なくなる。それくらい、ベテラン（ですよね？）のサディストさんはわかってると思うけど。
「では、再開――では、ないな。これまでは、ギブアップさせるための拷問だったが、これからは」
　片足を上げて、靴の裏をわたしの顔に押し当てて。ぐうんと押した。

「処刑だな」
「んん……？」
　身体が前後に揺れ始めた。吊っている縄が短いから、振り子の周期は短い。
　その周期に合わせて。今度は両側からプラチェーンで、お腹とお尻を同時に叩かれた。
　ぶゅん……バチャッ！
　ぶゅん……バヂャヂャッ！
「ん゛ん゛ん゛ーっ！」
　お尻はそれほど痛くないけど、お腹は痛いというより吐き気が込み上げた。でも殴られたときほどひどくはなかった。
「もっと揺すってやれ」
　ウィン……キュン……
　音とともに、景色の揺れが大きくなった。
　ウィン……キキュンウィン……
　もしかして。フォークリフトを動かして揺すってる？
　ぶゅん……バヂャッ！
　ぶゅん……バジャ！

「んゞんゞんゞんゞーーっ！！」
　ひどい。乳房と股間への同時攻撃。あまりの激痛で、全身が跳ねた。
　ぶゅん……バチチッ！
　ぶゅん……バジャッ！
「んんんっ！」
　今度は乳房とお尻。
　慣れたというよりは、感覚が麻痺してきたのかな。乳房も、爆発するほどの痛みじゃなかった。
　正面に二人が並んだ。
ぶゅんん……バヂャヂャン！
「んゞんゞんゞーっ！」
　二発とも股間に叩き込まれて、そこに凄まじい痛みが痛みが集中して爆発した。
　それでチェーンが絡まったらしい。二人が向かい合ってチェーンをいじってる。
「これくらいにしておこう。ひと休みだ」
　わたしも床に敷かれたマットに降ろされた。でも、背中まで。脚はフォークリフトに釣り

上げられたまま。

顔面の下半分にべったり貼り付いたガムテープを黒部さんが無雑作に引き剥がした。唇が引っ張られて痛かった。さっきのチェーンと同じ『痛い』という単語を使うのは気恥ずかしいけど。

口をこじ開けてショーツも引っ張り出してくれた。自分で吐き出せるけど、他人の手でされると、いかにも『扱われている』って気分になる。のがうれしい――なんて、『喉元過ぎれば』ってやつだね。

黒部さんが、わたしの横に座り込んだ。

「自分から哀願の手段を封じてくれとは、まったくたいしたマゾ娘だ」

最初に車の中でお話をしたときみたいに、ぽんぽんとわたしの股間をたたいた。あのときは、スカートの上から太腿をさわられただけでビクッとしたけど。今はじかに女の子の大切な部分をさわられても、それどころじゃないって気分。

「まだ三百万円にこだわるのか？」
　もちろん……だけど。
「もしもですけど。返済期限を四か月延ばしてもらったら――父は、お金を返せるんですか？」
　さっきの疑問を尋ねた。聞く相手を間違ってるような気もするけど。
　黒部さんは、今度は乳房をわしづかみにして、左右にひねくった。鞭で叩かれた跡が痛い。でも、股間をさわられたときと同じで、嫌悪とかは感じなかった。
「さてね。他人様の台所など知らんが。別口の百万が五月末の返済期限で、六月にも二百万ばかりある」
　それって、自転車操業ってやつ？　三百万円の返済は無理って、間接的に言ってる？
「わかりました。絶対に三百万円を稼ぎます」
　責めを打ち切ってくれたのは、チェーンが絡まったせいじゃないと思う。わたしの限界を見定めてくれたような気がしてる。

「では、もうしばらく遊ぼうか」
　黒部さんが立ち上がった。
　ん？　今なにか、黒部さんの言葉に引っ掛かるものを感じたけど。なんだろう。
　わたしはフォークリフトの逆さ釣りから完全に解放されて、手首のごつい鎖もほどいてもらった。
「そこで『気をつけ』をしてろ」
　ＡＤさんが、直径三十センチくらいの短い金属の円筒を、わたしの足元に置いた。いや、円筒じゃない。いたるところからトゲが突き出て――これ、有刺鉄線を巻いた物だ。ということは……やっぱりだ。黒部さんが、ごつごつした白っぽい手袋をはめた。
　うううう……こんなの、わたしの妄想にもなかった。
　これじゃＳＭでなくてバイオレンスだ。でも……緊縛＋全身針責めと考えられなくもない。
　黒部さんが有刺鉄線をずずーっと引き出し

て。わたしの身体に巻きつけ始めた。
痛い……あちこちにトゲが突き刺さる。けど、太いし手加減もしてくれてるので、針みたいに深くは突き刺さってこない。
「ふむ……」
二週目で上乳を巻かれて、三週目はこれまでより強めに巻いた――のは、脂肪だから深く刺さってもだいじょうぶということかな。でも四週目はすこし緩めてくれた――のは、手加減じゃなかった。ピンポイントで右の乳首の真上からトゲが突き刺さった。
「くううう……痛い」
黒部さんは思いきり有刺鉄線を緩めて、左の乳首もきっちり突き刺した。そのままずっと巻きつけていって――下乳、ウエストと下がっていく。
まさかまさかまさか――と、おびえていたんだけど。クリトリスをほじくり出してトゲを突き刺すなんて残酷なことは、しなかった。
お尻を巻かれて太腿も巻かれて。膝の上で

終わった。
「ペンチをくれ」
　ＡＤさんはすでに準備してて、すぐ黒部さんに手渡した。
「ここらあたりが緩すぎる」
　乳首と乳首の間の有刺鉄線をペンチで挟んで、ぐいっとねじった。
「ぎびいいっ……痛いい！」
　乳首が乳房の中に陥没した。トゲも、半分くらいまで突き刺さってる。
　つううっと、陥没乳首から血がしたたって、乳房に赤い筋を描いた。
「これで準備完了だな」
　え……？　まさか、この上からプラチェーンで叩くとか？
　黒部さんは、もっと残酷だった。ＡＤさんが、そっとわたしをマットの上に横たえて。黒部さんが腰、ふたりのＡＤさんが腕と腿に片脚を掛けた。
「せえの！」

「きゃああっ……痛い！　やめて！」
　ゴロンゴロンと、わたしを転がし始めた。
　プツツッ……ブチブチ……転がるにしたがって、背中にもお尻にも腕にも乳房にも下腹部にも腿にも、つぎつぎとトゲが深く突き刺さってくる。
「痛い痛い痛い……やめてください！」
　ぼろぼろ涙を流しながら、必死にお願いした。それでも、やめてくれない。マットの端まで転がされたら、反対向きにさらに転がされる。
「うあああ……ひどい……ひどいよ……」
　泣きじゃくった。ので、哀れに思ってくれたのか。最初から一往復と決めていたのか。
　身体を巻いてる有刺鉄線の下に縄を通して、天井のクレーン（真上まで動いてきた）から垂れている鎖の端に付いてるフックで身体を起こして立たせてくれた。吊り上げられるとき、いっそうトゲが突き刺さったけど。縄は胸を巻く三本の有刺鉄線をひとまとめにして

いたので、重みが分散したし乳房に刺さったトゲはむしろ抜けてくれたから、悲鳴はずっと可愛かった。まだ泣きじゃくってたけど。

三人掛かりで有刺鉄線を切ってくれた。

まだ全身が痛みでうずいてるけど、だんだん薄れてく。でも、全身血だらけ。マットにも、点々と散らばってる。何か所かでは赤い線にもなっている。

とんでもないことをされたんだと、あらためて恐怖がつのった。そこに、黒部さんがやさしい声（に聞こえた）でわたしに尋ねた。

「そろそろ、カラーコーンに処女を奉げる気になったか？」

え……と思って。それから、あああっ……と、叫びそうになった。

そうだった。これはわたしが、生身のペニスじゃなくて三角コーンで、自分の手で処女膜を破る気になるのを待つ間の『遊び』だった。

くそう。『降参』イコール三百万円を諦める

ことだと、そう思い込むように誘導されてたんだ。だから、サルグツワまでお願いした。あのとき、しっかり考えてれば、サルグツワじゃなくて、絶対に三角コーンを選んでた。

この人、することだけじゃなくて心そのものがサディストだ――なんて恨み言は心の奥に封印して。

「はい……やります」

答えて。やっぱり惨めな思いが込み上げてきて、でも、これ以上の拷問はされないですむという安堵に全身を包まれて。へなへなっと膝をついて、両手で顔をおおって、また大声で泣いちゃった。でも、今度は――涙とともに、泣き声とともに、心が安らかになっていった。これから、女の子として一生に一度で、しかもとんでもなく惨めな自虐行為をしなくちゃならないというのに。

看護師さん（それとも女医さんかな）が呼ばれて、傷の手当てをしてくれた。消毒と、

キシロカイン軟膏っていう痛み止めの薬を塗ってくれて、彼女はそそくさと逃げ出した。帰ったんじゃなくて、近くの車で待機してるんだって。よほどのマゾかサディスチンでもなけりゃ、撮影に立ち会わないよね。下手したら、助演女優とかさせられかねないし。

軟膏のおかげかな。痛みはあまり感じなくなったんだけど。痛みの引いた後に、なんだか熱いものが残ってる。クレバスは有刺鉄線でほとんどダメージを受けてないので、その奥が痛みとは別の感覚でうずいてる。ふう、わたしって根っからのマゾだ。

「あの……桃子さんて、黒部さんの奥様のことですか？」

別に、彼女に対抗心を燃やしたとかじゃない。休憩中で、みんな黙りこくってるから、場を取り持ったの。

黒部さん、遠い目になった。

「もう、十四年の昔になるな。俺と婚約して、その結納金で親の借金を返した。泣かせる話

だろ」
　どっかで聞いた話でもある。
「おまえと同じ●四歳だった」
「ええっ……！？」
　素っ頓狂な声を出しちゃった。
　黒部さんが苦笑（かな）した。
「言いたいことは、わかる。まだ結婚できないと言いたいんだな」
「はい……」
　まったく違ってたけど。
「だから、婚約だ。同居させて、黒部家の家風と仕来りをたたき込んでやった」
　それって、裸エプロンとか？
「親父――俺の親父も協力してくれた。二人で、前と後ろを分担してな」
　……！！
「まあ、いろいろあったが。今では、俺の命令には無条件で絶対服従する、かいがいしいマゾ雌奴隷妻になっている」
　頭が、くらくらしてきた。と同時に。わた

しなんて、まだまだだと思った。
　そんな一幕を挟んで。いよいよ、わたしの開通式。
「うまくやれよ。もし途中でギブアップしたら、極刑を執行する」
　それって、三穴同時のことかなと思ったのは、一瞬だけ。
「ちゃんと開通できたら――三人ずつで三回転、それから木馬で遊ばせてやる」
　三角木馬のことだろうけど、倉庫を見渡しても、そんな物は置いてない。シートで隠してるのかな。それは、そのときになってみればわかるけど。
　むしろ、極刑というのが気になった。でも、質問したりはしない。「興味があるのか。では、おまえの身体に教えてやろう」なんて、この人なら言いかねない。
「さあ、始めろ」
　三角コーンは、マットの敷いてない場所に置いてある。足の裏がよごれるな――なんて、

どうでもいいことが気になった。

わたしの後を一台のビデオカメラが追いかけてくる。もう一台は先回りして、正面で待ち受けている。

間近に見ると――とても無理、という絶望がひしひしと込み上げてくる。たしかに、黒部さんが言ったように、町中で見かける（学校にもある）のに比べると、先っぽがずっと細い。でも、円すい形だから、先端から五センチくらいのところで、もう缶コーヒーくらいの太さになってる。

でも、まさか裂けたりはしないだろう。桃子さん――黒部さんの奥様も経験してるんだから。でも、人妻と処女じゃサイズが違い過ぎるかな。

「どうした。まだ、ためらっているのか」

黒部さんの声が険しくなった。

わたしは意を決して、三角コーンをまたいだ。立っているだけでも、先端はクレバスぎりぎり。脚を開くと、ラビアを割って侵入し

てくる。
　このまま腰を沈めれば……きしきしっとこすれて、ラビアが内側に巻き込まれる。
「濡らさずに突っ込む気か。よほど、痛いのが好きらしいな」
　黒部さんにからかわれて、気がついた。そうだった。こんな状況で濡れてるはずがない（でも、腰の奥が熱い）。唾を塗ってもいいんだけど。『その気』になったほうが、よりスムーズにいくと考えて。クレバスの上端を指でこすった。
　クリトリスが刺激されて、じわあっと湿ってきた。濡れるところまではいかない。クレバスをかき分けて、クリトリスをほじくり出して。皮の上からつまんでしごいた。
「あんっ……」
　腰全体がじいんと痺れて、バギナの奥から熱い汁がにじみ出る。
　しばらく指オナを続けて、たっぷりあふれたお汁を三角コーンの先端にも塗りつけた。

あらためて。クレバスに三角コーンを埋めて。今度は痛くない。腰をちょっと前後に動かすと、穴の入り口に三角コーンの引っ掛かる感触が、かすかにあった。

大きく深呼吸をして。

「いきますっ！」

軽く曲げている膝の力を抜いた。

プラチェーンで叩かれたときとはぜんぜん違う、思いっきり上下左右に引き裂かれるような鋭い激痛がはしって。ブチッと処女膜の破れる音を――耳ではなく腰で聞いた。

「きひいい……いいいっ！　痛い！」

反射的にわたしは膝を伸ばしたというか、跳び上がったというか。股間を押さえて、その場にうずくまった。

三角コーンを見上げると、先端が赤く染まっていた。ロストバージンの証し――こんな無機物に、女の子のたったひとつしかないものを奪われたんだ。ものすごく悲しいのに、涙は出てこなかった。これまでの拷問で枯れ

果ててしまったんだろう。
「手をどけて」
　カメラが、わたしの股間に迫った。もう一台は、血に濡れた三角コーンを撮影してる。
　ものすごく惨めだけど。そんなわたしのかわいそうな姿を、もっとよく見てほしい。手をどけただけじゃなく――後ろに手を突いて、脚を開いて膝を立てた。M字開脚。わたし、自分をマゾだと思ってたけど、露出願望もあったのかな。
「おお、いいねえ。実に大胆。大ヒット間違いなしだ」
　監督さんの声を初めて聞いた。これまでずっと黒部さんが仕切っていたし。この人、なんのためにいるんだろ？
　また女医さんが来てくれて。今度は、診察だけ。
「処女膜に損傷が見られますが、これは当然のことですね。膣口にも軽い裂傷を生じていますが……」

女医さんは、まだそのままになっている三角コーンに嫌悪の目を向けた。
「当然ですね。医療に従事する者としては、数日の安静をお勧めしますが……続けてペニスを挿入するくらいなら、大事には至らないでしょう」
聞いているわたしとしては、複雑な気分。これから輪姦されるんだから、泣き叫んでも当然なんだけど、そもそもは自分から希望したことなんだし。
「キシロカイン軟膏を塗りましょうか？」
「いらん」
黒部さんが即答した。
「感度が落ちる。生の感触を、たっぷり味わわせてやる。激痛に泣くか快感に泣くかは、この娘次第だがな」
この人、優しいんだか恐いんだか、よくわからない。
黒部さんがスマホを取り出して――メッセージのやり取りかな。

「よし、ついて来い」
　全裸のまま、通用口から連れ出された。
　倉庫の横手に手洗い場があった。水道の蛇口に、新しいホースがつながれてる。
「四つん這いになれ」
　あ、わかった。アナルＳＥＸの前に腸を洗うのは常識だものね。ということは、希望どおりに三穴同時をしてくれるんだ。
　わたしは、いそいそと四つん這いになった。『懲りない』って言葉が頭に浮かんだけど、無視する。
　アヌスにホースが押しつけられて、ブジュウウウと、水がお腹にはいってくる。押しつけているだけだから、半分くらいはあたりに飛び散って、その冷たさが気持ちいい。お腹の中は気持ち悪いけど。
　ブジュウウウ……グルルルル。お腹の中で水が暴れまわってる。うつむいたら、お腹がぽっこり膨らんでるのが見えた。
　水を注入されてるあいだは、なんとか我慢

できた（させられた）んだけど。ホースが引き離された瞬間。
　ビジュウウウウ……アヌスを震わせながら水が噴出した。そして、最後には。ビチチッ……水でふやけた中身まで絞り出されてしまった。
「もう一回だ。ところで、俺とパートナーと運転手。誰にどこを使ってほしい？」
　は……？
「最初だけは、おまえのワガママを聞いてやる」
　つまり。バギナ、アヌス、オーラルを誰に犯してもらうかってことよね。
「出すまでに決めろ」
　また、水がお腹に押し入ってくる。わたしは大急ぎで考えた。
　あの作業服を着た薄汚い小父さんのペニスをくわえる（だけでなく、しゃぶる）なんて生理的に受け付けない。黒部さんには『初めて』を奉げたいなんて『淡い想い』みたいの

が、ある。こんな極悪非道な拷問を考え出した人だけど、パパにたくさんお金を貸してくれてる恩人（？）でもある。となると、自動的に決まる。
「決まったか？」
　ホースがアヌスから離れた。
　ビシュウウウ……
「誰が、どこだ？」
　噴水しながら答えるのって、間が抜けてるけど。
「はい。黒部さんに、お尻をお願いします。パートナーさんがお口で、運転手さんは前を」
　今度は、最後まで水だけだった。
　なんか、二度の放出だけで疲れ果てたというか、軽く放心した。男の人の射精後の賢者タイムって、こんなのかな――なんて、馬鹿を考えたりした。
「では、さっそく第二幕の開始だ」
　と言ったわりには。倉庫の中へ戻っても、襲いかかってこないし、押し倒しもしない。

ビデオカメラも手持無沙汰。
　五分ほどして、黒部さんの手下が戻ってきた。部屋の隅で服を脱ぎ始める。ＡＤさんといっしょに第二ラウンドのお相手かな。
　黒部さんも縄師さんも、パンツ一丁になった。手下さんがマットに寝て、カメラがわたしと彼とを撮り始めた。
「対面騎乗位でハメろ。やり方はわかるな？」
　それくらいの体位は知ってるし、要は三角コーンの応用だけど。
「あの……前は、運転手さんじゃなかったんですか？」
「そうだ。俺の運転手だ」
　あ、そういうことか。作業服の小父さんじゃなくてよかった――て、チロッと振り返ったので、わたしの考えてることを黒部さんに見透かされてしまった。
「彼はフォークリフトのオペレーターだ。運転手ではない」
　ま、いいけど。

気持ちをＨなこととＳＭ(わたしの中では、ほとんど同義でもある）に切り替えて。思い出した。黒部さんには、はっきり言ってなかった気もするけど。これは、まだ理想のロストバージンじゃない。

「あの……縛ってもらえますか？」

さんざっぱら痛いことをされて、恥ずかしいことをさせられたせいで、こんなことまでサラリと言えるようになった。

「ふん。縛られて、レイプされてる気分になりたいのか？」

「……はい」

「先生、頼みますよ」

「まったく。破瓜の直後に縛りをねだられたのは、三十年の経歴で初めてだな」

「ごめんなさい……」

なぜか謝ってしまって。黒部さんに、また苦笑された。

今度はマットにひざまずかされて。最初よりずっと高い位置まで手首をねじ上げられた。

そして。手首を縛られ、乳房を縛られ、二の腕にも厳しく縄を掛けてもらった。もう、それだけで頭がぽわんとしてくる。
　背後から抱きすくめられて、バギナに指を挿れられた。
「すっかり濡れているじゃないか。即ズボＯＫだな」
　これも初めて聞く言葉だけど、あまりに生々しい。
「あの……失礼します」
　黙ってまたがるのはお行儀がよくないから、いちおうはご挨拶をしてから。手下さんをまたいで、腰を下ろして――あら。手下さんもお辞儀してる。三角コーンみたいになってほしい。
「そういうとき、ふつうは、口を使うんだが、いちおうパートナーに初物を味わっていただきたいから……そうだな、素股で刺激しろ」
　聞いたことあるけど……どうするんだっけ。戸惑ってると、手下さんが指導してくれた。

「マ●コをチ●コにこすりつけるんだよ」
品のない言い方。でも、とにかく言われたとおりにした。
ラビアをペニスに押しつけて、腰を前後にゆっくりと（しか、できない）動かしてると――だんだんペニスが起き上がってきた。チェーンで叩かれたせいて、ラビアを圧迫すると鈍痛があるんだけど、でも、快感もあるし。Hなことを無理矢理やらされてる（脳内変換）って思うと、ますますバギナがじゅくじゅくになってくる。
「もうじゅうぶんだ。ハメてくれ」
カチコチになったペニスを、手下さんが手を添えてきっちり直角に勃てた。
ご挨拶はさすがに恥ずかしいので。黙って腰を浮かして、クレバスにペニスを迎え挿れて、三角コーンの体験を活かしてバギナにすんなりと位置を合わせて。慎重に膝を曲げていった。
「くっ……」

すこしだけ痛かったけど、三角コーンよりは、ずっと楽。だいち、腰を沈めていっても、バギナが拡張されない。

ずぶぶうっと奥深くまで一気に進んで、ぺたんとお尻が手下さんの太腿に当たった。そこで止まった。まるきり、三角コーンと様子が違う（こっちのほうが、ずっと楽）。

「はふうう……」

達成感。だけど、埋まった穴はひとつだけ。

「そのまま、身体を倒しておいで」

手下さんが乳房に手を当てて、命令なのかアドバイスなのか。ともかく、その言葉に従った。

黒部さんみたいに、乳房をつかむんじゃなくて、わたしが押しつけるのを受け止めてくれてる。

上体が三十度くらいまで水平に近づいたところで、後ろから腰をつかまれた。ので、そのまま、じっと待った。つぎに起こる事態はじゅうぶんに理解してる（つもり）。

尻たぶが左右に割られて、アヌスに指が触れた。むにゅむにゅとマッサージされて、それから冷たい感触。グリセリンかローションか、とにかく潤滑剤だ。
「かわいい穴だな」
Hな部分を褒められて、恥ずかしいのとうれしい（女の子にとって『かわいい』は魔法の言葉）のとが半々。
黒部さんの指がはいってきた。まったく痛くなかった。穴を拡張するように、ぐにいいんぐにいんと、ゆっくり動く。
「このまま続ければ、挿入時の痛みも減るが……そうしてほしいか？」
ううう、意地悪な質問。でも、カマトトぶるのは嫌なので、はっきりと頭を横に振って意思表示した。
「ふん、このマゾっ娘（こ）め」
指が抜かれて。ぺちんとお尻を叩かれた。
そういう言い方は、自分でも考えることがあるけれど、他人に言われてみると。極長バ

イブとか持って呪文を唱えてる『マゾっ娘ルナ』の姿が頭に浮かぶ。

なんてアホなこと考えてるうちに、後ろから黒部さんがのしかかってきて、お尻の谷間を熱くて硬いものにこじ開けられた。

「口を開けて、ゆっくり深呼吸をしていろ」

アナルＳＥＸの教科書(？)どおりの指示。男の人は、女性の呼吸のタイミングに合わせて挿入するんだから、わかりやすいように意識――しなくても、腹式呼吸をすれば、息を吸ったときは自然と上体が起き上がり気味になる。ということを新発見。

すううう、はああ。

アヌスに軽く圧迫があって。三回目に息を吐き始めると同時に。

めりめりめり……ずぶぶうっと、一気に貫かれた。

「ぎびい゛い゛っ……熱い！」

そう。痛いっていうよりも、熱い。そして、内臓を押し上げられる気持ちの悪さ。

弾力のある大きな壁がお尻に突き当たった。黒部さんの下腹部だ。根元まで挿入されたんだ。
「はあああ……」
息を吐き切ったら、熱くて痛いのがすこし楽になった。これで、わたしも二人前（？）のオンナになれた。なんて感慨に浸ってるところを、ツインテをつかまれて、頭を引き起こされた。
「口を開けなさい」
縄師さんの勃起したペニスが、鼻先に突きつけられた。素直に口を開けたら、即座にぐぼっと突っ込まれた。ので、自分からくわえにいくなんて、マゾっ娘にあるまじきはしたない真似はしないで済んだ。
「たっぷり虐めてやるぞ」
ずんっ、ずんっ、ずんっ……と、黒部さんがピストン運動を始めた。
同時に、下からも突き上げられる。
腰が上下に激しく揺すぶられて、ツインテ

はずっと黒部さんに馬の手綱のようにつかまれてるので、顔はガックンガックンと前後にも傾く。それに合わせて、口の中のペニスが乱暴に暴れ狂う。

アヌスはずっと熱痛いし、バギナもやっぱり痛い。喉を突かれて吐き気も込み上げてくる。のに……バギナとアヌスがひとつになって、快感とはいわないけど、妖しい感覚に包まれてくる。そして。胸がきゅううっと締め付けられる。これが、マゾの快感なのかもしれない。

痛い……熱い……苦しい……でも、もっと虐めてほしい。

手下さんの手が、ふたりの密着している部分をまさぐった。

「ん゛ん゛ん゛っ……！」

もう硬くなってたクリトリスをつままれて、電撃のような鋭い純粋の快感が、腰から脳天まで一気に貫いた。オナニーでアクメるときの百倍は凄まじい快感。

全身が爆発したような錯覚。爆発は何度も繰り返される。
「出すぞ。ちゃんと飲めよ」
ぺちぺちと頬を叩かれて、意識にかかっていた霧が晴れた。縄師さんの声だった。
口の中のペニスが、さらに膨らんだと思った直後――喉の奥に衝撃を感じた。射精されたんだとわかって、息を止めた。ペニスを吐き出して喉の奥に溜まった違和感を押し戻して吐き出すなんて手間を掛けずに、そのまま飲み込んだ。ゴックンは、マゾっ娘として当然のお作法――なんてことを、飲み込んだ後で思ったりする。
その直後に、黒部さんもフィニッシュしてわたしの中からいなくなった。
最後に残った手下さんが、猛然とスパートした。
わたしは上体をまっすぐに立てて。膝を屈伸させて手下さんのリズムに合わせた。上下運動は、もう苦痛ではなくて、かすかだけど

快感に変わっていた。

人生初の中出し（の感触はなかった）をしてもらって、過激な初体験は終わった。けど、すぐに次体験が始まった。

ずっと出番のなかった監督さんが下になって、二人のＡＤさんが前と後ろ。みんな、ゴム帽子をかぶってた。

まだ快感の爆発の余韻で頭がぽわんとしていたし、慣れたのか麻痺したのか、あんまり熱くも痛くもなかったし吐き気もしなかったし。あっという間に終わったって印象。

バギナもオーラルも、生とゴムの違いがわからなかった。お口は、微妙に味が違ったけど、生臭い匂いはいっしょだった。ゴックンしなくてよかったのが、ありがたいのか物足りないのか。

カメラマンさんたち三人に犯された（脳内変換）三体験目は、かなりつらかった。正直、早く終わって休ませてほしくなってきた。

ところが。フォークリフトのオペレータさ

んが残ってたし。見張り役の人たちまで交代で現われて、若いＡＤさんが二発目に挑んだりして……わたしが希望した（？）十人どころじゃ済まなかった。

最後のほうでは三人ずつじゃなくて、バギナへの挿入だけで、いろんな体位を教えてもらったけど……正常位とバックと騎乗位（対面と背面）しか覚えてない。

わたしの縄がほどかれて女医さんが呼ばれたのは、外が薄暗くなってからだった。

「とにかく、身体を拭いてあげてください。それからでなければ、手当はできません」

そんなことを言われて、あらためて自分の身体を見たら。下半身は赤と白と、それが混じったピンク色とに染まってた。おかしいな。交代のたんびに（それなりに）綺麗にしてもらってた記憶があるし、『その他大勢』さん達はゴムを着けてたはずなのに。もしかして、ビデオの為の演出かもしれない。

あと、全身が砂とか土で汚れてた。マット

を敷いてあっても、みんな土足だったから、そのせいだ。
　放置されてるうちに、バギナもアヌスも痛みがよみがえっていたけど、それも麻酔剤入りの軟膏を塗ってもらったら治まった。でも、ちょっともったいない気もした。腰の奥の疼きは残ったから、まあいいか。
「どうだ。じゅうぶんに堪能したか？」
　黒部さんが意地悪な質問をした。でも、わたしは素直に答える。
「はい……ありがとうございました」
「しかし、まだ約束の木馬遊びが残っていたな」
「え……あ！？」
　正直、もう勘弁してほしい。のに。本人の意志なんか無視されて責められるのが、なれ合ったプレイではない本物のＳＭだ――なんて気持ちが動くんだから、どうしようもない。
　でも、いちおうは哀願しておく。
「もう……赦してください。死んじゃいます」

黒部さんじゃなくカメラに向かって訴えてるんだから、バレバレ。

きちんと服装を整えた縄師さんに髪をつかんで上体を引きずり起こされて。またテキパキと縛られた。縛られるわたしの身体はフニャフニャだったけど。

フォークリフトが、倉庫の隅っこに置かれた木枠をマットの横まで運んできた。置台といったほうがいいのかな。縦横が一メートルちょっとで、高さは十センチくらい。上下の面は、目の粗いスノコになってる。たしか、この上に荷物を積んで、フォークリフトで運ぶんだっけ。

置台の上には、いくつかの木材が載ってるだけ。その木材を片して、黒部さんが天面のスダレを持ち上げたら――まん中から二つに折れて、三角形（△）になった。

これ、組み立て式の三角木馬だ！

底の面も直角に折れて脚になった。

三角形は、正三角形よりとがってる。頂点

になった材木は、きちんと（？）鋭角に削ってある。

これから三角木馬に乗せられるんだと思うと……身体が震えてきた。のに、バギナか子宮かわからないけど、腰の奥がきゅうんと切なくなって、じわあっと濡れてきた。わたしって、自分で思ってた以上にドMだ。

黒部さんがわたしを見て、また苦笑した。何度目だろ。

「目が潤んでるな。まったく……すこしは怖がるとか怯えるとか、初心な少女らしい反応をしてみろ」

初心じゃない。わたし、学校では奥手で通ってるけど。クラスメート（女の子）の低レベルな下ネタにしらけて無視してるだけ――黒部さんは、そんなこと知らないか。

またウインチで吊るされて、三角木馬の真上まで運ばれた。

三角木馬の上に下ろされていって。素直に脚を開いて、またいだ。木馬の側面はスノコ

だから、いざとなればそこに足を掛けて腰を浮かせるかな。

木馬の頂点がクレバスを割った。食い込んでくる。痛いけど、想像（妄想）してたほどじゃない。真上から見落ろすと、木馬の頂点には、ボールペンの芯よりは太いくらいの丸みがつけられていた。

「痛い……」

と言ったのは、痛みをやわらげようとして悶えて――クリトリスを木馬に押しつけるため。うまくいかなかった。

「桃子も物足りないと言っていたが、なるほどな」

ふうん。これも、奥さんで試したんだ。

二人のＡＤさんが、わたしの脚を木馬の角度以上に開いた。とたんに、食い込みがきつくなった。

「痛い……くううう」

今度のは、本気。悲鳴まではいかないけど、自然と呻き声が漏れる。

スノコに鉄パイプが通されて、膝の上を縛られた。ＡＤさんが手をはなしたら、一方に身体が傾いてバギナがえぐられた。

木馬の下にロープが通されて、身体の傾きを修正しながら、鉄パイプの両端に結びつけられた。ロープで引っ張られた分だけ、さらに食い込んでくる。本格的に痛い。わずかな丸みのせいだろう、切り裂かれるんじゃなく、クサビが食い込んでくるみたいな痛さ。

「あああ……痛い。すこし緩めてください」

はっきりと、黒部さんに顔を向けてお願いした。

黒部さんがわたしのすぐ前まで来て。両手を伸ばして、乳房をわしづかみにした。ぎゅううっと指を食い込ませて、乳房全体をひねった。

「やめてください。痛い、痛い……」

「こういう状況でおっぱいを虐めないというのは、マゾ雌に対して失礼だからな」

虐めるのは、もっと失礼だと思う。

しばらく乳房を虐めてから。黒部さんは、紙を何百枚も束ねられそうな、大きな目玉クリップを取り出した。
「これもサービスだ」
刺激されてぴょこんと飛び出てる乳房に噛みつかせた。
「きゃああ……痛い！　取ってください」
噛みつかれた瞬間には、目から火花が飛び散った。そして、ずっと激痛が続く。洗濯バサミの何倍も痛い。黒部さんが手をはなすと、目玉クリップの重みで下に引っ張られて、激痛が倍になった。
黒部さんが、さらに目玉クリップをポケットから取り出した。
「これで、どこを挟まれるのが、いちばんつらいと思う？」
うううううううう……洗濯バサミでも秒殺されるのに。しかも、自分では取れないのに。あ……これも、わたしが妄想してるシチュだ。妄想より苛酷だけど。

「どうした？　自分で自分のことがわからないのか？」
　黒部さんの右手が、木馬で割り開かれたラビアをかき分けて、クリトリスをつまんだ。
「……そこです」
「そこ、とは？」
「クリトリスです。お願いですから、そこには着けないでください」
　黒部さんはクリトリスを（やさしく）しごいて勃起させて、にゅるんと皮を剥き下げた。皮の上から洗濯バサミでも秒殺なのに！
「いやです！　やめてください！」
　本気でお願い――懇願した。やめてくれないのはわかってるし、やめたら黒部さんに失望するけど。でも、本気で恐い。恐怖で、頭が真っ白。やっぱり、やめてほしい。
　目玉クリップがクワッと口を開けて、その陰にクリトリスが隠れた――と同時に、プラチェーンや有刺鉄線とは比べものにならない、凄まじい大激痛が爆発した。

「ぎぎゃあああああああああっ……！！」
　爆発じゃない。大激痛は、そのまま居座ってる。もしも、今すぐこれを取ってもらえるなら、なんだってする。何をされてもいい。
　でも、それは口にしない。わたしが想像できるよりずっとひどいことをされるような予感がしてる。
　わたしは初めて、心の底から黒部さんが恐ろしくなった。
　三脚が据えられて、そこにビデオカメラがセットされた。
「まさか……このまま放置するんですか？」
　五分も十分も（まさか、三十分とか一時間？）このままにされたら……心の底から怯えて、なのに、胸の奥がきゅうんってねじれる。
「このままではないよ」
　ＡＤさんがひとり一個ずつ、コンクリートブロックを運んできた。
「嫌です……ほんとに、もう赦してください。虐めないでください」

無視されて。鉄パイプにコンクリートブロックの穴が通された。

ずううううんと重みが加わって、股間が真っ二つに割り裂かれたような錯覚と、いっそうの激痛。

「やあああああああっ……痛い！」

別のロープがスノコに通されて、コンクリートブロック同士を結び付けた。これで、コンクリートブロックが滑り落ちてくれる偶然も、完全に消し去られた。

股間に食い込む重たい激痛と、目玉クリップの鋭い激痛と。また、ぼろぼろと涙を流しているわたしと――を残して、ほんとうにみんなが、倉庫から出て行った。

なんて馬鹿なことをしてしまったんだろう。わたしは、後悔してる。

長年の妄想を実現できて、パパを助けてあげられる一石二鳥だと思ってたけど。

自分で自分を虐めるのとは桁違いの痛さだ。女の子の力でこれくらいの痛さなら、ごつい

男の人にされたら、倍くらいは痛い――なんて想像が、まるきり違ってた。倍でなくて、ゼロが二つくらいは多い。自分で自分を虐める時には、無意識に手加減していたんだと気づいた。

パパを助けてあげられるのは――それについては、すごく自分を褒めてあげるけれど。萌咲さんが、わたしにはできないかわいがられ方をされてるのがうらやましくて、わたしにしかできない何かをしたかったという――不純な動機が混じっている。

おとなしめ（フェラチオ止まり）のビデオで、わたしもそこそこ『冒険』にときめいて、パパも四か月の先延ばし期間中に、なんとかお金の都合をつけて――それくらいで、ちょうど良かったんじゃないかなって。

そんなことを考えてると、痛みは股間にもクリトリスにも乳房にも、ずっと居座ってるけど、意識が痛みからわずかにそれるから、ほんのちょっとだけ、楽になる。激痛と後悔

とで、ぼろぼろ涙をこぼし続けるのが、甘く感じられるくらいには。

倉庫は窓も完全にふさがれてて、外の様子はわからない。夕暮れも過ぎて、そろそろ夜だと思うけれど。一泊二日の撮影だから――このまま、朝まで放置される可能性だってある。と、たった今、気づいて。背筋が凍りついた。

でも、まさかね。じゅうぶんに撮影できてるだろうから、いい加減でカメラを止めてくれるんじゃないかな。

いるのかいないのかわからない（でも、しっかりと、わたしの初フェラを奪った）監督さんなら、そうすると思う。

お芝居ではなく、黒部さんが本物のサディストだとしたら（絶対にそうだ）……わからない。

どうして、わたしは萌咲さんを憎まないんだろう。唐突に、そんな疑問が頭に浮かんだ。二年前に、いきなり同居するようになって。

いつの間にか、パパを寝取って。うん、きっとそうだ。パパが無理矢理というんじゃなくて、萌咲さんのほうから……誘うかなあ。

いや、じゅうぶんに（ではないけど）考えられる。わたしだって、黒部さんをびっくりさせるような行動に出たんだもの。

萌咲さんに考えを戻して。

つまり、わたしはそれだけパパを好きなんてものじゃなくて、愛してるんだ。

萌咲さんとＳＥＸしてるパパを、どうしても憎めないし嫌いにもなれない。

ふつうだったら、萌咲さんに嫉妬するか恨むかするけど……パパが愛してる対象を否定するのは、パパを否定することと同じだと、そういう無意識が、わたしの中にあったんじゃないかな。

痛みが、すこし楽になってきた。慣れたというか、麻痺してきたというか。

虫歯（ひとつだけ、あった）だって、ずきずきずきずき、ずっと痛いはずなんだけど、

ほかのことに夢中になって、忘れてることもある。

痛みのことを考えたら、またつらくなってきた。縛られててオモリを吊るされてて、身じろぎひとつくらいしか出来ないけど、そうすると激痛がいっそう食い込んでくるので、まるで彫像のように、わたしはじっとしている。そのせいか、腰とか背中とか首まで痛くなってきた。まるきり、痛みの質が違うけど。

――出入口が開いて黒部さんの姿が見えたときは、安堵が半分と、不安が半分。これで木馬（とクリップ）から解放してもらえるかもしれないという希望と、でも別の責めが始まるかもしれないという恐怖と。

「カンナを掛け過ぎたようだな」

意味がわからない。

黒部さんは木馬の背中を指でなでて、チッと舌打ちした。

「桃子と同レベルの責めでも、おまえは耐えられそうだな」

わかった。木馬の先を丸め過ぎた（たった五ミリ未満で？）と言ってるんだ。もしかしたら、黒部さんの奥さんが乗る木馬は、先端が刃物のように尖っているのかもしれない。
「撮影は、これで終わりだ。それとも、もっと乗っていたいか？」
「もう、嫌です。下ろしてください！」
桃子さんだって、きっとこう答えるだろう。自分から虐めてほしいってお願いするのは、マゾとしての礼儀（？）に反すると思う。
嫌なのに、つらいのに、サディストに虐められる――すくなくとも、そう振る舞う。のが、マゾのあるべき姿なんじゃないだろうか。『サービスのＳ、満足のＭ』なんて言葉があるけど、それはなれ合いのプレイにしかすぎなくて、加虐と被虐の関係ではないと思う。
「そうか。さすがに満足したか」
黒部さんが、指をデコピンの形にして、紙クリップを垂らしたままの胸にゆっくりと近づけてきた。逃げても逃げなくても同じだけ

ど、嫌がらなくちゃいけないかな――と、とっさに思って上体をよじったのが失敗だった。
「痛いっ……きひいっ！」
木馬に股間をえぐられてから、乳首に衝撃を食らった。上下からの痛みが……子宮をきゅうんとねじった。わたしって、ほんとうに懲りないマゾっ娘だ。

こうして、わたしの凄絶（で素敵）な初体験は終わった。女医さんの手当（あきれ返ったのか、ずっと無言で、それまでより雑な感じがした）の後で、黒部さんはわたしをすこし遠くのシティホテルへ連れ込んでくれなくて、ただ送り込んでくれた。ふかふかのベッドで翌朝の十時過ぎまで、ひとりでぐっすり眠った――というか、疲労困ぱいして意識を失ってたというか。
黒部さんに教えられていたので、ルームサービスでブランチを頼んだ。女子●学生が一人で宿泊なんて不自然だと思うけど、ボーイ

さんは、まるきりふつうに接客してくれた。シティホテルの『ふつう』がどんなのか知らないけど。

黒部さんが迎えに来てくれて。ＡＴＭカードをくれた。

「これなら、無理に隠す必要もないだろう。通帳は、俺のほうで預かっておく」

見せてもらった通帳の残高は三十万円だった。値切られなくてよかったと、ちょっぴりうれしくなった。

それから家まで送ってもらって。

応接室兼パパの部屋で、今度はパパと黒部さんとわたしの三人だけ(良子さん抜き)で。

「おかげで､素晴らしいビデオが撮れました。書き換えていただいた手形ですが」

黒部さんが、Ａ４を横に三つに切ったみたいな色付きの紙（一瞬、金参百萬円の大きな文字が読み取れた）を取り出して、目の前で破いた。ビデオに出演したせいで、芝居がかってる？

「こうさせていただきます」
　パパの顔色が変わった。
　ただのイメージビデオ、それも無名の女の子に三百万円も払うなんて、あるはずがないものね。
「貴様……娘に何をした！」
　ソファから立ち上がって、向かい合ってる黒部さんの胸倉をつかんだ――つぎの瞬間には、床にぺしゃってた。黒部さんて護身術の心得もあるんだ。
「お断わりしておきますが、すべては月奈ちゃんのほうから申し出たことですよ。後で、これをご覧ください。まだラフ編集ですので、いろいろと見苦しいかも知れませんがね」
　ＵＳＢメモリーをテーブルに置いて、黒部さんが立ち上がった。
「待て。まだ話がある」
「私には、ありませんね。ああ、そうそう。月奈ちゃんを問い詰めたり叱ったりはしないでやってください。すべては、メモリーの映

像を見ればわかることですから」
　立ち去る前に、わたしをかばってくれた。
　わたしも、逃げることにする。
「三百万円分も働いたから、疲れてるの。部屋で休むから」
　ちょっと意地悪な言い方かなとも思ったけど。映像を見て（どこまで記録されてるんだろ？）パパが受けるショックに比べたら、どうってことないよね。

　――パパは、わたしに何も言わなかった。でも。『腫れ物を扱うように』という表現が具体的にどういうことか、痛いほどわからせてくれた。
　良子さんは映像を見なかったと思うけど、パパがそういう態度だから、自然と右へならえって感じ。
　まるきり変化のなかったのは、萌咲さん。わたしがイメージビデオに出演したのを、脳天気にうらやましがってた。完成版が（ネッ

トのファイル交換ソフト経由で）送られてきたので、見せてあげた。もちろん、アリバイ用のやつね。
「うわあ、すごくＨだ。こんなのになるって、知ってたの？　恥ずかしくなかったの？」
　なんて質問は、あいまいにはぐらかした。こんな合法的でおとなしい映像がＨだったら、裏のほうは――ＳＭだね。意味不明。